

[原著]

「失語症者の格助詞の誤りに関する考察 ～格助詞「ニ」を中心に～」

○宮 本 恵 美¹⁾ 大 塚 裕 一¹⁾ 池 寄 寛 人¹⁾,
馬 場 良 二²⁾ 村 尾 治 彦²⁾

Observations on Case Particle Mistakes in Aphasic Subjects:
Focusing on the Case Particle “Ni”

Megumi MIYAMOTO, Yuuichi OOTSUKA, Hiroto IKEZAKI
Ryoji BABA, Haruhiko MURAO

1) 熊本保健科学大学 保健科学部 リハビリテーション学科
2) 熊本県立大学 文学部

和文抄録

失語症者の格助詞「ニ」の多義ネットワーク構造がどの段階で障害されているかについて明らかにすることを目的とし、失語症者に対し、格助詞「ニ」の助詞の穴埋め課題および文想起課題を実施し、認知言語学的視点から分析・検討を行った。その結果、助詞の穴埋め課題では「存在の位置関係」の意味用法以外は、中心的な意味用法の課題文が正答率の高い結果を示した。また、文想起課題結果でも中心的用法である「移動」の用法の想起率が高い結果を示した。

このことから、失語症者の格助詞「ニ」の構造は、中心的用法は比較的確立された状態にあるものの、拡張した用法になるにつれて、意味カテゴリー構造が変化している、あるいは活性化しにくい状況となっているのではないかと考えられた。

キーワード：格助詞「ニ」、認知言語学、失語症、多義ネットワーク構造、中心的用法

I. はじめに

「失語症」とは、一旦獲得された言語が限局性の大脳病変によって損なわれたもので、認知症などの全般的な知能低下や失行、失認、構音障害など他の機能障害によって、二次的に生じているものではない症候群のことである。一般に「話す」「聴く」「読む」「書く」の言語のすべての様式に障害が及ぶとされている（稲村2011）¹⁾。失語症状はその症状特徴の組み合わせに基づいて、いくつかの失語症群に分類される。失語症には多くの分類法があるが、現在、日本で最も多く使用されている分類法²⁾を表1に示す。この分類では失語症を、「流暢性」、「聴覚

的理解力」、「復唱」の3側面の障害の程度により8つのタイプに分けている³⁾。

失語症者の失文法や錯文法など統語障害に関する研究は、1970年代後半頃から藤田ら⁴⁾を中心に始まり、現在まで「生成文法理論」の考えをベースとした理論構築が盛んに行なわれている。藤田（1993）⁵⁾は失語症者の統語障害が統語構造の解析と意味の解釈のどちらにあるか検討し、統語構造の解析能力は文法性判断だけでなく語順や能動態・受動態の識別が意味の解釈の前に行われるかどうか、文の意味の読解に文脈がどのように作用するかなどについて検討している。このような研究から、失語症にみられる言語行動の崩壊過程には言語理論で取

言語特級 項目 失語型	流暢性	聴覚的 理解	復唱	呼称	読解	書字
ブローカ	非流暢	比較的保存	障害	障害	障害	障害
ウェル ニッケ	流暢	障害	障害	障害	障害	障害
伝導	流暢	比較的保存	障害	障害	比較的保存	障害
全失語	非流暢	障害	障害	障害	障害	障害
混合型 超皮質性	非流暢	障害	比較的保存	障害	障害	障害
超皮質性 運動	非流暢	比較的保存	比較的保存	障害	比較的保存	障害
超皮質性 感覚	流暢	障害	比較的保存	障害	障害	障害
失名詞	流暢	比較的保存	比較的保存	比較的保存	比較的保存	比較的保存

表 1 (Benson1988失語型の分類 一部抜粋)

り扱われる言語の構造に直接対応する規則性や階層性が認められる場合が多いことや、このような規則性や階層性は従来の失語症分類に基づく個々の症候群を超えて、そのいくつかにまたがる形で認められる傾向があることなどを明らかにしている。

しかし、失語症患者の言語症状にみられる特徴にはこのような言語理論からだけでは予測できない側面も認められる。例えば、失語症者の言語理解面の誤りの症状として、「包丁デ切る」のような「道具の用法」である格助詞「デ」の理解は可能にもかかわらず、「腹痛デ休む」のような「原因の用法」である格助詞「デ」の理解は出来ないなど、また、表出面の誤りの症状として「リンゴヲ食べる」のような「対格用法」である格助詞「ヲ」の発話は頻繁に認められるのにもかかわらず、「道歩ク」というような「場所格用法」である格助詞「ヲ」の発話はほとんど表出されないというような場面が認められる。以上のように、格助詞の意味用法の違いによって、失語症者は理解あるいは表出のしやすさの差があるのではないかと考えられる。

現在、失語症の格助詞の理解や表出に関する先行研究として、助詞の種類（格助詞、接続助詞、副助詞など）によって「脱落」や「誤用」の傾向を検討したもの（神尾1986）⁶⁾、格助詞別に格助詞の誤り発生機序と回復過程を検討した研究（藤田1991）⁷⁾や名詞と助詞の結びつきという観点から検討した研究（小嶋1995）⁸⁾などは行われている。しかし、失

語症者が各格助詞の意味用法別にどの用法が正答に至りやすく、逆にどの用法が誤りやすいのかといった検討は全く行われていない。さらに、現在、文レベルに用いられている評価法については、標準失語症検査（SLTA）⁹⁾の下位項目（短文の理解・口頭命令に従うなど）や1962年に開発された「トークンテスト」¹⁰⁾などが用いられているものの、例えば、「標準失語症検査」の下位項目「聴く」の短文レベル、複雑文レベルで用いられている助詞においては「が」「に」「を」「で」「から」「と」などが用いられているが、それぞれの用法は比較的中心的な意味用法に限られている。たとえば、助詞「デ」においても、その意味用法には「道具」「場所」を中心として「原因」「時間」など様々なものが挙げられるが、この検査で使用されている刺激文は「櫛でマッチを触ってください」という「道具」の「デ」の用法のみであり、「道具」の用法以外の理解が可能かということは明らかにならない点に問題があると考えられる。また、トークンテストで使用されている格助詞も、意味用法が限られており、各格助詞の意味用法の違いによる能力を測ることは困難である。

格助詞には、「ガ」、「ヲ」、「ニ」、「デ」、「ヘ」、「ト」、「カラ」、「ヨリ」、「マデ」の9種類が存在するが、「日本語文法ハンドブック」の中で松岡ら（2000）¹¹⁾は、格助詞「ニ」の意味用法を「存在の位置（例：図書館ニ新聞がある）」、「到着点（イタリアニ行く）」、「受け手（例：妹ニ本をあげる）」、

「変化結果（例：信号が赤ニ変わる）」、「移動の方向（例：大阪ニ向かう）」、「出どころ（例：先生ニ聞く）」、「時間（例：5時ニ起きる）」、「割合の分母（例：3日ニ1度）」というように8種類の意味用法に分類している。以上のように、格助詞「ニ」は格助詞のなかで最も多い8種類の意味用法をもち、格助詞の中では最も多義であり、失語症者にとって混乱をきたしやすいと考えられることから、本研究では格助詞「ニ」について取り上げていく。

次に今回は、調査から得られた結果を認知言語学的視点から分析していくため、以下に「認知言語学」について少し触れておく。

認知言語学とは、山梨（2000）¹²⁾によれば、認知言語学は、言語の感性的・身体的な能力、さらにはこの種の能力を含むより包括的な認知能力に関わる要因を言語現象の記述・説明の基盤とするアプローチとしている。いわゆる、五感、運動感覚、イメージ形成、視線の投射、主観的カテゴリー化などに関わる人間の一般的な認知能力によって言語能力が動機付けられるとしている。

その考え方を基本に「助詞の多義性」について概

観する。私たちには、ある存在を一般的なスキーマによって特徴付けられるカテゴリーの一例として理解する能力やあるカテゴリーの典型的な事例、つまりプロトタイプと類似している新たな事例が存在する場合、類似性の認知プロセスを介してその事例をカテゴリーの拡張事例として取り込んでいく能力が備わっていると考えられている（Langacker1993）¹³⁾。また、日常言語のカテゴリーに明確な境界線を引くことは不可能であり、カテゴリーのメンバーは、すべてが同等の資格でそのカテゴリーに帰属するのではなく、そのカテゴリーの中心的な成員から周辺的な成員まで段階性を築きながら分布しているとされている。助詞においてもそのようなカテゴリー化が行われていると認知言語学では考えられる。

森山（2005）¹⁴⁾は、「①移動の着点」、「②移動の起点」、「③存在の位置関係」、「④経験の主体」という4つの意味用法があること、そして4つのカテゴリーは4通りの認知主体の把握の仕方と関係しているとしている（図1）。また、「プロセス的把握」では、客観的把握による「移動の着点」用法がプロトタイプであり、主観的把握による「移動の起点」の

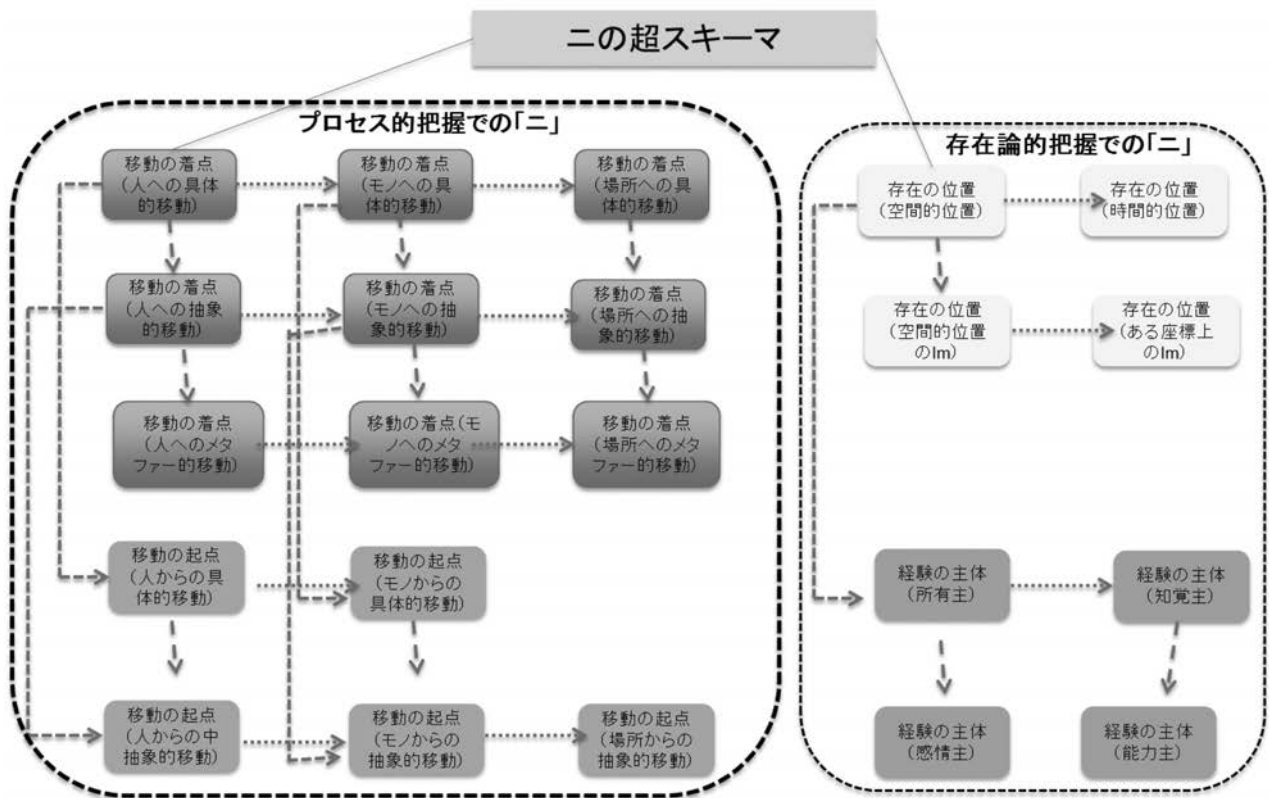


図1 「格助詞ニの意味構造」：「格助詞ニの意味構造についての認知言語学的考察」

2005 森山 新より引用

用法が拡張的用法であるとしている。さらに、「存在論的把握」の用法では、客観的把握による「存在の位置関係」用法がプロトタイプであり、主観的把握による「経験的主体」用法が拡張的用法であるとしている。さらに森山は、日本語学習者が格助詞「ニ」についてさまざまな意味用法が如何に習得されているのかをKYコーパスを用い、その習得プロセスを分析し、考察した。その結果、「移動先」や「存在の位置」の用法の習得が早く、「動作の相手」の習得が遅れ、「経験主」の使用が少ないと述べている。また、日本語学習者の格助詞「ニ」のカテゴリーがどのように形成されているか調査した結果では、カテゴリー化の基準に曖昧さが残りカテゴリー内でも用法が拡散しており、まとまりに欠けていたと述べている。また、宮本(2012)¹⁵⁾では、失語症者の動詞の多義ネットワーク構造がどの段階で障害されているのかについて明らかにすることを目的として、統制した2文節文の刺激を用いて、健常者のデータを基に認知言語学的立場から提唱されたネットワークモデルと比較し、分析・検討を行った。その結果、失語症者は重症度やタイプにかかわらず最もプロトタイプの構文の正答率が高く、周辺的な構文は中心的用法に比べて正答率の低い傾向が示された。

Ⅱ. 方 法

<格助詞「ニ」の助詞の穴埋め課題>

- ・ 被験者
失語症者15名(男性 6名 女性 9名)
平均年齢 66.9±11.4歳
失語症重症度 軽度(11名), 中等度(4名)
- ・ 選択基準
「標準失語症検査」の聴覚的理解課題「単語の理解」及び「短文の理解」, 読解課題「仮名单語の理解」, 「漢字単語の理解」「短文の理解」が100%正答であること, 「レーブン色彩マトリシス検査」で24点以上であることとした。
- ・ 実験手続き
被験者に図2のような課題文を含めた84文を与え, 空白に入る正しい助詞を選択するように指示し, 正解と判断するものに○印を促した。また, 被験者が単語の読み方や意味について尋ねた場合には, 教えても構わないこととした。

・ 得点化方法と採点基準

正答した場合には1点, 誤答した場合には0点とし, 結果に関しては森山(2005)¹⁴⁾にしたがって, 「移動の着点: 授与の相手(具体的移動: 中心的用法)例: 友達に本をあげた」, 「移動の着点: 移動先(具体的移動)例: 母の横に座る」, 「移動の着点: 動作の相手(抽象的移動): 姉に文句を言った」, 「移動の着点: 使役(具体的移動)例: 私の娘に食べさせる」, 「移動の起点: 授与の主体(具体的移動: 中心的用法)例: 友達にプレゼントをもらった」, 「移動の起点: 原因(抽象的移動)例: 合格の知らせに喜んだ」, 「存在の位置関係: 位置(空間的用法の中心的用法)例: 庭に池がある」, 「存在の位置関係: 時点 例: 朝7時に家を出よう」, 「所有の主体 例: 私に権利がある」, 「知覚の主体 例: 私に幻覚が見える」に分類し, 正答率を算出した。また, その結果をカイ二乗検定にて解析した。

<格助詞「ニ」の文想起課題>

- ・ 被験者
失語症者13名(男性5名, 女性8名)
平均年齢69.1±10.4歳
- ・ 選択基準
標準失語症検査の結果, 軽度失語症者に分類されるもの, 且つ, レーブン色彩マトリシス検査で24点以上のものとした。
- ・ 実験手続き
検査者は, 被験者に対し格助詞「ニ」のつく文を5つ想起するように指示を与え, 口頭または書字にて表出してもらう方法で行なった。その際, 被験者が口頭で表出した場合には, 検査者がその内容を聞き取り記録することとした。また, 文の想起を上限5つ促したが, 最終的に5つに達していない場合も, 想起した文はすべて分析対象とした。最終的に作成された文が日本語の文として判別できないものに関しては, 分析対象外として除外した。
- ・ 得点化方法と採点基準
想起されたすべての文は, 森山(2008)¹⁶⁾にしたがって, 格助詞「ニ」の「移動先 例: 花子が福岡に行く」, 「目的 例: レストランへ食事に行く」, 「原因 例: 病気に苦しむ」, 「変化の結果 例: 氷が水になる」, 「動作の相手 例: 花子が太

図2 格助詞「二」穴埋め課題の例文

今日は娘の誕生日だ。娘（ ）プレゼントをあげた。【で、より、から、も、と、に、を】
 ポチはおながすいたようだ。ポチ（ ）餌を与えた。【で、より、と、に、から、しか、を】
 友達が田中さんに手紙を書くそうだ。友達（ ）田中さんの住所を教えた。【を、しか、に、から、と、より、で】
 姉は私の洋服を汚してしまった。私は、姉（ ）文句を言った。【で、より、に、と、から、しか、を】
 太郎は、ワインを飲んでいて。テーブルの上（ ）グラスを置いた。【で、と、より、に、を、しか、から】
 おじさんの還暦祝いに出席した。わたしは、母の横（ ）座った。【も、より、から、と、に、の、を】
 今日は私の誕生日だ。私は友達（ ）プレゼントをもらった。【へ、に、を、が、や、で、と】
 私は高校に入学した。私は両親（ ）お祝いしてもらった。【が、や、の、に、で、へ、を】
 子供が風邪をひいた。薬を子どもに飲ませた。【に、や、で、も、でも、など、しか】
 おいしいイチゴをたくさん買って来た。私の娘（ ）食べさせるためです。【も、など、しか、で、に、でも、や】
 今日は合格発表の日だった。合格の知らせ（ ）家族みんなで喜んだ。【と、しか、の、や、に、が、など】
 今日は学校登校最後の日だった。先生の心のこもったことば（ ）卒業生が泣きました。【など、が、に、の、や、と、しか】
 友達の家へ行った。庭（ ）池があった。【へ、しか、を、で、に、から、が】
 熊本は比較的住みやすいところだ。商店街（ ）アーケードがある。【しか、を、から、へ、に、より、で】
 今日は期末試験だ。朝7時（ ）家を出よう。【の、と、や、へ、が、を、に】
 昨日の夜は早く寝た。今日の朝は5時（ ）目が覚めてしまった。【に、を、が、や、へ、の、と】
 勝負で相手が負けた。私（ ）権利がある。【と、や、を、しか、へ、で、に】
 彼は2時間前から将棋をしている。彼（ ）勝ち目があるようだ。【を、と、で、へ、しか、や、に】
 朝から調子がおかしい。私（ ）幻覚が見える。【で、しか、に、と、や、を、ので】
 今日は近所で、夏祭りが行なわれているようだ。私（ ）子どもたちの楽しげな声が聞こえた。【や、と、で、を、ので、しか、に】

郎に会う」,「使役の相手:太郎に牛乳を飲ませた」,「授与主 例:次郎に花束をもらった」,「動作主 例:太郎が次郎に殴られた」,「存在の位置 例:庭に池がある」,「時 例:7時に起きる」,「空間的基点 例:店は学校に近い」,「抽象的基点 例:この服は雨に強い」,「所有主 例:私に息子が1人いる」,「知覚主 例:私に阿蘇山が見える」,「能力主 例:私にピアノが弾ける」,「感覚主 例:私にその言葉がうれしい」に分類し,想起数を計測した。また,想起された文は,各被験者で意味用法別に各文1点として集計し,分散分析(LSD法)にて解析した。

Ⅲ. 結 果

・ 格助詞「二」の穴埋め課題の結果

失語症者の格助詞「二」の助詞穴うめ課題の結果を図3に示す。移動の着点(授与の相手)では87%(26/30)正答,移動の着点(移動先)では87%(26/30)正答,移動の着点(動作の相手)では73%(22/30)正答,移動の着点(使役)では81%(21/26)正答であった。また,移動の起点(授与の主体)では90%(27/30)正答,移動の起点(原因)70%(21/30)正答,存在の位置関係(位置)77%(23/30)正答,存在の位置関係(時間)93%(28/30)正答,経験の主体(所有の主体)73%(22/30)正答,経験の主体(知覚の主体)53%(16/30)正答であった。

「①移動の着点」,「②移動の起点」,「③存在の位置関係」,「④経験の主体」という4つの意味用法別にみると,4つのカテゴリーの中の③「存在の位置関係」以外のカテゴリーでは,統計的な有意差は認

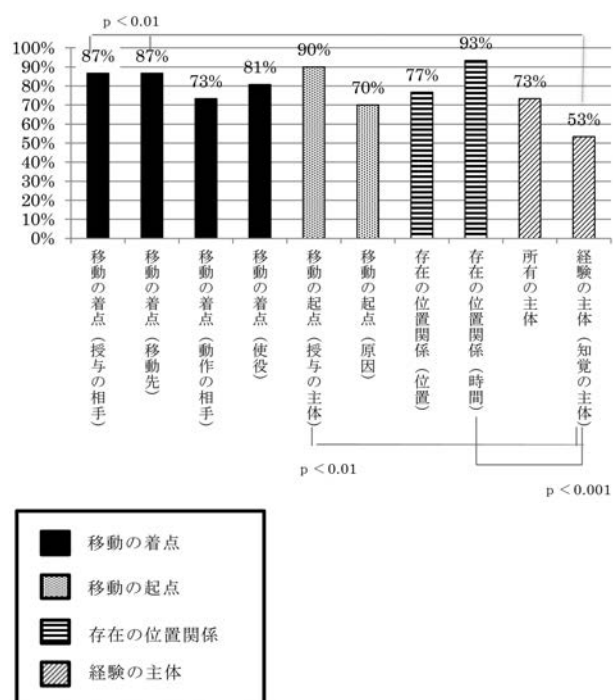


図3 格助詞「ニ」穴埋め課題の結果

められなかったものの、中心的な意味用法が周辺的な用法よりも正答率の高い傾向を示した。全体的に見ると、「存在の位置関係（時点）」の用法が最も正答率が高く、続いて「移動の起点（授与の主体）」の正答率が高かったのに対し、「知覚の主体」の正答率は低かった。以上、カイ二乗検定を行った結果、「知覚の主体」と「移動の着点（授与の相手、移動先）」、「知覚の主体」と「移動の起点（授与の主体）」、「知覚の主体」と「存在の位置関係（時間）」の間に有意差が認められた。（ $p < 0.01$, $p < 0.01$, $p < 0.001$ ）

ここで、格助詞「ニ」の誤りパターンに着目すると、助詞「ト」への誤りが多く認められ（格助詞「ニ」の穴埋め課題の全誤答中18%）、続いて格助詞「カラ」への誤りが多かった（格助詞「ニ」の誤り中）ものの、最も多い誤りでも全体の18%にしか過ぎず、特に誤りの傾向は認められなかった。個別に見ていくと、助詞「ト」への誤りや助詞「ヤ」への誤りが最も多かったのは、「知覚の主体」の意味用法の課題文である“今日は近所で、夏祭りが行なわれているようだ。私（ ）子どもたちの楽しげな声が聞こえた”であった。

• 格助詞「ニ」の文想起課題の結果

文想起課題においては、「移動先」（32文、71%）が最も多く、続いて「動作の相手」（6文、13%）、「目的」（3文、7%）であり、「空間的基点」や「時」については僅か2%（1文）しか認められなかった。以上、分散分析を行った結果、中心的な用法である「移動先」との間ですべての用法と比較し有意差が認められた（ $p < 0.05$ ）（図4）。

Ⅳ. 考 察

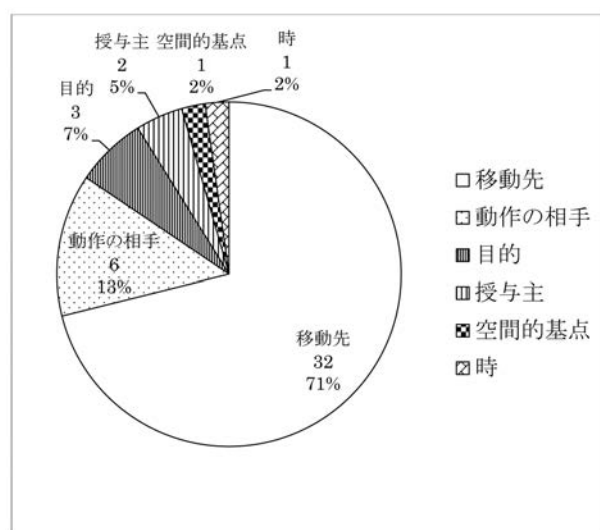


図4 格助詞「ニ」の文想起課題の結果

今回、失語症者の格助詞「ニ」の穴埋め課題を実施した結果、「存在の位置関係」を除く3つのカテゴリーでは、中心的な意味用法が周辺的な用法よりも正答率の高い結果を示し、文想起課題の結果でも中心的な用法である「移動先」と「動作の相手」の用法が大部分を占めていた。

まず、助詞の穴埋め課題において、「存在の位置関係」では「位置」の用法より周辺的な用法である「時間」の正答率が高かったことについて述べていく。森山（2008）¹⁷⁾は、母語習得過程において、幼児は「時」の認識が容易でないものの「存在の位置（位置）」の意味用法に関しては理解しやすいという理由から、「存在論的事態」では「時点」の用法（例：8時二起きる）よりも「存在の位置」の用法（例：庭ニ小さな池がある）が中心的な用法であるとしている。ただ、森山が実施した成人日本語母語話者の格助詞「ニ」の使用比率を調査した結果では、「移動先」の用法の次に「時」の用法が多かったと報告している。このことから、「時」の用法は失語

症者にとっても日常生活場面で比較的多い頻度で耳にする機会が多いことが予測される。おそらく、このことが、助詞穴埋め課題で「時点」の用法が高い成績を示したことに影響していると考えられる。ただ、失語症者の文想起課題の結果では、格助詞「ニ」の「時」の用法が2%しか認められなかった。このことから、少なくとも失語症者にとって「時」の用法は、日常生活場面で頻繁に耳にする用法であり理解しやすい用法であるものの、中心的な用法として存在するとは言い難いのではないかと考えた。

次に、「移動の着点」の 카테고리の中で、もっとも正答率の低かった「動作の相手（抽象的移动）：姉に文句を言った」に着目する。ここで使用されている「言う」という動詞には「発言する」という行為は伴うが、相手との間に“具体的な動力連鎖”はなく、その“動力連鎖”は非常に抽象的である。さらに森山（2008）¹⁷⁾では、「動作の相手」は表面的な位置の変化に加え、内在的な動力の連鎖を理解しなければならない点に触れ、認知能力の発達との関係性について指摘している。そのため、失語症者にとっても格助詞「ニ」の構文ネットワーク上ではより周辺的な用法として位置し、活性化しにくい状況にあり、正答率が低下してしまったのではないかと考えられた。

さらに、「移動の起点」の 카테고리の中で正答率の低かった「移動の起点：原因（抽象的移动）例：合格の知らせに喜んだ」に着目する。ここで用いられている「合格の知らせ」が「原因」であり、動力連鎖の起点となっている。ただ、これを中心的用法である「移動の起点：授与の主体（具体的移动：中心的用法）例：友達にプレゼントをもらった」の「友達」と比較すると能動性が弱いと考えられる。また、「友達」と比較すると「合格の知らせ」は明らかに抽象的であり、この点も失語症者にとっては「移動の起点：原因」は格助詞「ニ」の構文ネットワーク上、周辺的な位置に存在し、活性化しにくい状況にあるのではないかと考えた。

加えて、「経験の主体」の 카테고리の中で正答率の低かった「知覚の主体 例：私に幻覚が見える」に着目する。この「私」に関しては、「知覚主」を表しており、「幻覚」は“知覚される対象”，「私」は“それが位置づけられる場所”である。これは、具体的な“動力連鎖”や“移動”を伴わず、且つ、知覚対象も抽象的であるといえる。そのため、失語

症者にとってこの用法は構文ネットワーク構造上周辺に位置し、活性化しにくい状況にあったのではないかと考えた、また、「経験の主体」の 카테고리の中では「所有の主体 例：私に権利がある」が「知覚主」よりも高い正答率であったが、他の「①移動の着点」,「②移動の起点」,「③存在の位置関係」と比較するとそれぞれの 카테고리の中心的用法の中で最も正答率が低かった。このことから、「①移動の着点」,「②移動の起点」,「③存在の位置関係」,「④経験の主体」の4つの 카테고리の中で「経験の主体」の用法が格助詞「ニ」の多義ネットワーク構造上最も周辺的な場所に位置しているのではないかと考えられた（図5）。

最後に、格助詞ニの誤りパターンに着目すると、助詞「ト」への誤りや助詞「ヤ」への誤りが最も多かったのは、前述したように「知覚の主体」の意味

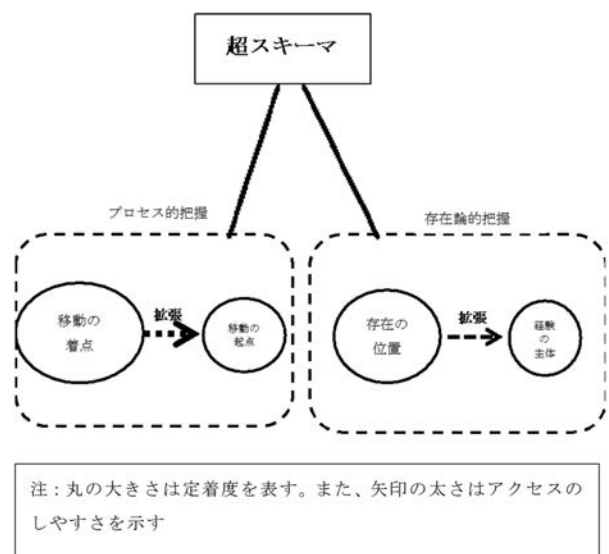


図5 失語症者の格助詞「ニ」多義ネットワーク構造

用法の課題文である“今日は近所で、夏祭りが行なわれているようだ。私（ ）子どもたちの楽しげな声が聞こえた”であった。これは、知覚を表す格助詞「ニ」の意味用法がわからなかったため、“人物（ ）人物＋格助詞ガ”という構文に着目し、空欄へ並列を現す並列助詞「ト」あるいは「ヤ」を入れることを許容してしまったのではないかと考えた。以上、失語症者の格助詞「ニ」についての構文ネットワーク構造と誤りパターンについて述べた。

前述したように、現在の失語症者に対する聴覚的理解障害の評価法については、例えば「標準失語症

検査」や「トークンテスト」に用いられている動詞においても助詞においても、それぞれの用法は比較的中心的な意味用法に限られている。また、失語症構文検査¹⁷⁾においても、失語症患者が意味レベル・語順レベル・助詞レベルの、どのストラテジーをたよりに理解しているかという部分は明らかになるものの、やはり構文及び動詞の多義性に基づくさまざまな構文パターンの理解については着目されていない。今回の研究結果や宮本(2012)¹⁵⁾の報告からも、失語症者はプロトタイプの意味用法の理解及び表出は良好であるにもかかわらず周辺の用法では理解及び表出が難しいという結果に至った。このことから、失語症者の聴覚的理解の評価については、構文の長さや複雑さという観点だけではなく、評価で使用する構文が様々な方向から中心的用法か周辺の用法かという観点も同時に考慮していかなければ、それぞれの失語症者の真の言語能力については明らかにならないと考えられた。また、失語症訓練についても、従来から用いられてきた方法としては、刺激法を基にした文型の理解・表出課題(主語+が+動詞、目的語+を+動詞という文型から徐々に複雑な文型を学習させる)や適切な格助詞の選択・補充課題(助詞が除かれた文を完成させる)や文型の変換課題(同じ意味内容を異なる文型で表現する)や語または文節の並び替え(語又は文節で区切られバラバラの語順にされた文を適切な文に並び替える)や文中の主語や目的語に対し、動作主や対象などの役割を与えて、文の理解を促す方法としてのマッピング・セラピー(mapping therapy)などが用いられており、いずれの訓練法も「構文の文構造の複雑さ」については着目されているものの、「構文の多義性」についての視点を取り入れたアプローチ法とはなっていない。今後、「多義性」を考慮したアプローチ法としては、例えば、格助詞「二」に対するアプローチであれば中心的意味用法である「移動先」の用法から開始し、その後、周辺の意味用法へとステップを踏むようなことについての導入方法も検討していく必要があると考えた。

V. 結 語

今回は、失語症者対し、助詞の穴埋め課題および

文想起課題を行なった。結果、失語症者の格助詞「二」の構造は、中心的用法は比較的確立された状態にあるものの、拡張した用法になるにつれて活性化しにくい状況となっているのではないかと考えられた。今後、失語症評価や訓練について“多義性”という視点を取り入れることが必要であることが示唆された。

VI. 謝 辞

本研究を行なうにあたり、調査のご協力を賜りました熊本県内外の言語聴覚士の皆様方、失語症の患者様方へ深謝いたします。

VII. 付 記

本研究は「認知文法を応用した失語症者の構文ネットワーク構造の解明」(基盤研究(C)課題番号23520470、代表者:村尾治彦)の助成により行った。

VIII. 文 献

- 1) 平野哲雄, 稲村恵, 木村奈緒他: 言語聴覚療法臨床マニュアル 改訂第2版 第五章「失語症」 pp176-257, 2011
- 2) Benson, F. D.: Classical syndromes of aphasia. In : Boller F, et al. (Eds) . Handbook of clinical neuropsychology. Vol.1, Chap. 14, Elsevier, Amsterdam, , pp267~280. 1988
- 3) 石川裕治 編:『失語症』, 建白社 pp46-56, 2012
- 4) 藤田郁代, 高橋泰子, 豊島経子: 失語症者における構文の理解の構造, 聴覚言語障害, 6, 151-161, 1977
- 5) 藤田郁代: 失語症者の構文の理解障害に対する情報処理的アプローチ, 失語症研究 Vol13 165-173, 1993
- 6) 神尾昭雄: 失語症における言語学的側面—失文法の言語分析, 失語症研究 Vol6, pp1131~1136, 1986
- 7) 藤田郁代: 日本語の失文法と錯文法の特性と回復パターン, 失語症研究 Vol11, pp96~103, 1991
- 8) 小嶋知幸, 宇野彰, 餅田亜希子他: 失語症者の

- 助詞選択に関する計量国語学的検討 (1) - 名詞と助詞の結びつきを中心に -, 失語症研究 Vol15, pp249～261, 1995
- 9) 日本高次脳機能障害学会 (旧 日本失語症学会) Brain Function Test 委員会 編集, 日本失語症学会『標準失語症検査 (SLTA: Standard Language Test of Aphasia)』, 日本高次脳機能障害学会 (旧 日本失語症学会), (株) 新興医学出版社, 1975
- 10) 七沢老人リハビリテーション病院訳・改訂版『トークンテストマニュアル』, 1984
- 11) 松岡弘, 庵功雄, 高橋信乃, 中西久実子他: 日本語文法ハンドブック. p16-27. 2000
- 12) 山梨正明: 認知言語学原理, くろしお出版, pp2-48, 2000
- 13) Langacker, Ronald W: Reference-point Constructions. Cognitive Linguistics, No4, No1, 1-38, 1993
- 14) 森山新: 格助詞ニの意味構造についての認知言語学的考察, 日本認知言語学会論文集5, 1-11, 2005
- 15) 宮本恵美, 村尾治彦, 大塚裕一, 橋本幸成: 失語症者における構文の多義ネットワーク構造の検討～認知言語学的視点より～, コミュニケーション障害学 Vol.29 No3. 153-161, 2012
- 16) 森山新: 認知言語学から見た日本語格助詞の意味構造と習得, ひつじ書房, pp109-159, 2008
- 17) 藤田郁代, 三宅孝子, 中西之信他「失語症構文検査 試案 IIA」, 日本聴能言語士協会, 失語症検査法委員会, 1984

(平成27年 1 月31日受理)

Observations on Case Particle Mistakes in Aphasic Subjects: Focusing on the Case Particle “Ni”

Megumi MIYAMOTO, Yuuichi OOTSUKA, Hiroto IKEZAKI

Ryoji BABA, Haruhiko MURAO

A study was performed to determine the level of impairment of case particle “ni” polysemous network structures in aphasic subjects. Particle fill-in-the-blank and sentence recollection exercises using the case particle “ni” were given to aphasic subjects, and the results were analyzed and investigated from a cognitive linguistic standpoint. For the fill-in-the-blank exercises, if divided into four semantic categories (1. Target of movement, 2. Initiator of movement, 3. Location, and 4. Subject of experience), there were higher percentages of correct answers for central semantic usages versus peripheral usages for categories 1, 2, and 4. For sentence recollection exercises, there were 84% for the target of movement usage (both “destination” and “recipient of action” usages) and only 2% for the location usage. While structures for case particle “ni” in aphasic subjects were relatively intact for central usages, it is believed that semantic category structures change or become more difficult to activate as the usage expands.